

№ 112

1996.

1. 30

# 岐阜の博物館

編集兼発行  
〒501-32 関市小屋名  
(百年公園内)  
岐阜県博物館内  
岐阜県博物館協会  
TEL 0575-28-3111(代)  
振替 名古屋 6 37909

第20回

## 東海三県博物館協会交流研修会に参加して

「博物館行政に力を入れてこそ、はじめて文化行政ができるのです。」との三重県博物館協会長の挨拶にはじまる第20回東海三県博物館協会交流研修会が、去る平成7年10月4日・5日の2日間にわたり開催されました。

会場は三重県の斎宮歴史博物館で、参加者は愛知県31名、岐阜県13名、三重県35名でした。

記念講演では、三重県博物館建設推進室長伊藤久嗣氏が、「三重県センター博物館(仮称)の整備」という演題でお話しされました。

三重県では、昭和61年に「博物館構想」が県文化審議会に答申され、県・市町村・民間の活力を結集して、センター博物館(中央博物館)と、テーマ博物館(専門・地域別)のバランスのとれた配置を行っているそうです。まず平成元年10月にテーマ博物館として、国史跡の斎宮跡発掘品を紹介する「斎宮歴史博物館」が開館し、センター博物館は、基本調査が平成3年から始まり、開館予定は平成12年だそうです。

また三重県博物館協会には、一年に一度の事業として、「移動博物館」というものもあり、博物館活動の広範囲への普及としては、他県には見られないものだと思います。

最近、全国的に館・園の数が増えている反面、入館者の低迷に頭を痛め、あれこれ苦慮されているところも多いようです。三重県では、今までの考古学展示はマンネリ化してきたため、今後は人と自然との共存を考える環境型博物館として、「自然と人間」、「水と暮らし」をテーマに総合博物館の整備を進めているということでした。

博物館は娯楽と知識の源泉であるので、マルチメディアや各種情報システムを駆使し、サロンミュージアムを設け、その中ではサポートスタッフにも参加してもらう、そんな構想を持つ「センター博物館」は、「観賞型」から「参加型」へ、また生涯学習の活動の場として、大いに期待されることでしょう。

また、講演の後、「館における防災対策」をテーマに、研究協議が行われ、各県の代表者が



東海三県博物館交流研修会  
会場 斎宮歴史博物館

ら事例発表がありました。岐阜県からは内藤記念くすり博物館の稲垣さんがスライドで実例を発表されました。

特に印象に残ったのは、阪神大震災の折、文化財レスキュー隊の一員として、神戸市内の博物館等で、展示品や文化財の被害状況をつぶさに見てこられた愛知県美術館の木本氏の報告でされました。

従来、地震というと横揺れを想定して対策を考えてきたものが、今回は直下型だったということで、ほとんどその効果が見られなかったということでした。今後は、入館者に対する避難誘導(身障者用のスロープ設置を含め)や、ガラスケースの破損対策はもちろんのこと、直下型地震に対する防災対策が早急に求められている課題のようです。

2日目の施設見学は、江戸時代中期の国学者本居宣長記念館と、北海道の名付け親である松浦武四郎記念館でしたが、どの館も遺品の収蔵管理や、展示方法に新しい試みとして、映像やテレビ画面を使って展示に変化を持たせるなどの苦勞が伺えました。今場でもある斎宮歴史博物館は、ハイテクを駆使し、王朝貴族の言葉を復元し、三面マルチスクリーンに映し出される迫力ある映像に圧倒されました。今後もこの交流研修会が博物館界に新風を取り入れ、魅力あるものにするための情報交換の場であることを強く感じ帰路につきました。

(事務局 古野村美保子)

## 全国博物館大会報告

# 今、博物館に求められているもの

— 博物館マーケティング、利用者サービス、  
展示技術の変化への対応 —

第43回全国博物館大会が、10月26日・27日の二日間、青森県弘前市の弘前文化センターを会場に開催された。



開会式後の全体会議の中で文部省生涯学習局社会教育課課長谷川裕恭氏から社会変化に伴う機能の充実、生涯学習機能の整備、博物館相互の連携、マルチメディアを活用した情報化事業の実施などの行政報告があった。

午後からは、博物館マーケティング、利用者サービス、展示技術の変化への対応というサブテーマをうけて、東京国立博物館長佐野文一郎氏の司会で、シンポジウムが持たれた。その中でUCCコーヒー博物館長諸岡氏から、館のトップがマーケティングを意識した正しい方向付けをしていく「ミュージアムマネージメント」が大切であることなどが意見として出された。

また、東京大学総合研究資料館の西野氏から、マルチメディアを活用して、同館に導入中である画像データベースで電子博物館を目指した構想などが紹介され、参加者の注目を浴びた。

26日の夜は、懇親会も開かれ和気あいあいと交流を深めた。

27日の午前中は、先日と同じテーマでフォーラムが開催された。

前日同様佐野氏の司会で進められ、千葉県立現代産業科学博物館長の青木氏、ミュージアムパーク茨城県自然博物館長中川氏から、それぞれの館の取り組んでいる事例を交えながら利用者サービスの在り方についての意見が出された。

各パネリストの共通の意見として、テーマである「今、博物館に求められているもの」は遠大なテーマであるので、会員相互が協力して一歩一歩前進していくことが大切であることで集約された。

午後からは、施設見学の時間がとられ、弘前市立博物館を見学した。

施設見学の後、全体会議があり、その中で参加者からの質疑応答の時間がとられ、「国際的な事例を取り入れたハンドブックができないか」「日博協が中心となって特別展示の企画を行えないか」などの質問に対して、毛利専務理事がハンドブックは必要と考えているが時間を要すること、全国ネットの特別展示よりも支部単位のネットワークが有効であるなどの回答がされた。

最後に、次のような決議書が、国及び関係機関に要望することが採択されて、第43回全国博物館大会の幕が閉じた。

### 1. 博物館法改正の推進

- (1) 私立博物館の振興のために、公立博物館と同様の補助
- (2) 学芸員等の資質向上と処遇の改善

### 2. 税制

- (1) 博物館法に規定する登録博物館の設置運営を主たる目的とする法人を、特定公益増進法人に追加すること
- (2) 指定寄付の適用緩和
- (3) 私立博物館に対する租税特別措置法関係規定の見直し

### 3. 助成

- (1) 生涯学習を積極的に推進するために、博物館が行う収集・保管調査・研究・展示・普及等に対する補助・助成の増額と新設
- (2) 科学技術の発達による新しい博物館活動の整備に対する助成

(岐阜県博物館長 清水廣美)

## 第66回 公開講座報告

# 革新の美「織部と染織」

と き 平成7年11月19日(日)  
ところ 岐阜県陶磁資料館(多治見市)  
講師 切畑 健 氏



第66回公開講座は、東濃地区の公開講座委員の方々の御尽力及び岐阜県陶磁資料館の御協力により、大織部展開催記念講演会に併せて行われました。

講師の切畑 健 先生は現在は大手前女子大学教授でいらっしゃいますが、京都国立博物館研究官を長年お勤めになり「日本染織史上で作期の明らかな資料の収集」や「日本の芸能関係染織にみる特殊性の研究」をなされ、日本の染織研究においては第一人者の方です。

講演では、桃山時代における染織の「新しい」現象が、織部を生む土壌でもあったことを当時の記録やスライドを用いて話されました。

### 講演要旨

#### 桃山時代の染織における「新しい」現象

##### ア. 新しい秩序の完成

日本全体が革新され、新たに多くの物が取り入れられたために、確定性の少なさと多様性の甚だしさがこの時代の特色であった。

##### イ. 絹物の潤沢化

この時代、大量の絹が生産され、贈答品としても用いられるようになり、庶民の間で絹

物を潤沢に着用するようになった。

##### ウ. 新種の織物の出場

あらゆる種類の反物に新種が現れて広まった。具体的には「ちりめん」「さや」「りんず」などが使用されるようになった。

##### エ. 紅色の多用

老若男女の別なく、様々な色で彩色をほどこした着物をまとい、特に、緋色、赤紫色、紅色が多く用いられた。

##### オ. 絞り染めの重用

帷子の染め模様として、白地に紅の花と青葉を一面に染めた「辻が花」が用いられるようになった。

##### カ. 新種の服飾の出現

胴服、陣羽織、具足下着など、特定の時にしか着なかったものが、一般に用いられるようになった。

##### キ. 外来染織の渡来

ピロード、ラジャ、タフタエン、ダマスコ等いろいろの布地が何千反もポルトガル等から渡来し、庶民の間で使用された。

##### ク. 外来服飾の受容

マント、ジバン等の外国の曲線裁が導入され、服装の形が従来のものと変化してきた。

##### まとめ

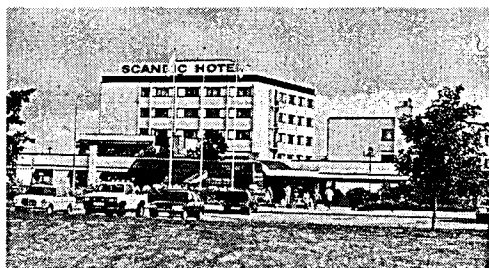
染織による「新しい」現象は取りも直さずこの時代の大きな流れでもあり、織部を生む土壌でもあった。(公開講座委員 富田幸八)



(特別寄稿)

## 参加した国際会議 ICOM 委員会について②

吉田 幸平



(研究発表した分科会のホテル)

私の発表は、7月5日午前10:15分から10:30分という短い時間のオープン・フォーラムで、分科会の中で、会場に最も近いスカンデック・ホテルであった。このホテルは豪勢で、発表会場の部屋が幾つもあった。恐らく大会本部要員の宿舎になったホテルと思われた。

発表は私が3番目であった。最初の発表はシカゴ動物園の主任女性学芸員で、動物園における経営の概略をVHFで紹介した。美しい広い動物園の中で、子供のための部屋を造ってのカリキュラムも発表した。また、次のスロバキヤの発表者は、自分の喋る要点をフィルムに編集して、自分の大きな顔をTVに写して喋って、自分は横に座っているだけで、VHFとスライドが終わってから質問を受けるという方法であった。準備周到な参加と、発表への意気込みを感じた。その点、私はそのテーマを絞り、準備に対してもっと一考すべきではなかったかと思えた。3番目の私の番に女性司会者が、私の名を読んだので立ったとき司会者は「吉田のためのプリンドがあるので配布します」といって茶色の包を解いてプリントを渡し始めたので「助かった、よし行けるぞ」との思いが走った。

この分科会の参加者を初め数えたら48名、司会2人、統括者1人であった。分科会としては小さな分科会であったが、こういった国際舞台特に白人集団の前で緊張した。

私は始める前に、自己紹介を許して欲しいと

いって次の事項を述べた。

「コウヘイ・ヨシダ Y・O・S・H・I・D・A 日本から来ました。

現在、私は日本甲冑(侍の戦場でのプロテクター)研究所長として、また教授の資格で、某女子大学で文化人類学と日本民俗文化史を教えています。現在は小さな研究所ですが、最近大きなスポンサーが現れましたので、次のオーストラリア ICOM には、大きな甲冑博物館長として参加できるでありましょう。私個人の日本甲冑は200領と研究蔵書3万冊を蔵しています。序でお許し願いたいことは、私は傷痍軍人です。第二次世界大戦には、北中国戦線で毛沢東共産軍と闘い、また終戦の8月にはソビエト軍と闘いました。そして私は迫撃砲と戦車砲弾によって、左の鼓膜と歯をなくし(現在義歯)左手が不自由なのです。ですから、私の聴力は困難です。その上シベリヤで捕虜として6年間を過ごしました。

若し私に質問があれば、誠に恐縮ですが、英語か露西亜語で書いて下さると有り難いと思います。本当はロシア語の方が得意なのです。予想外に耳が遠いので、必ず聞き直さねばなりませんのでお願いします」

補聴器を最大にして、これだけを喋ってから配布したものを、ゆっくり読んで行った。聴衆は寂として声なく静かな静寂が続いた。喋るより、ゆっくりと郑重に読んだ。正しい発音と特にアクセントに注意した。

13枚を読むことは不可能であった。時計を横において15分が終わったときは6枚目であった。“Time is Over” “Thank You so much” といって終わった。予想していなかった大拍手が起こり、私自身、驚きと戸惑いがあった。

この瞬間、この小論文は成功したと思った。  
(注:内容については編集委員会で省略した部分もあります)

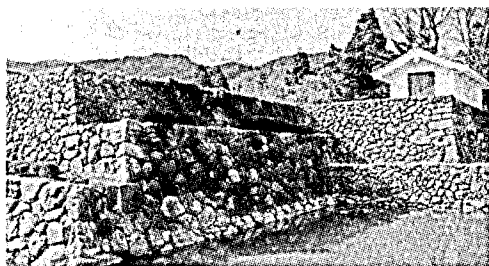
タルイピアセンター

〒503-21

岐阜県不破郡垂井町2443の1

TEL 0584-23-3746

垂井町は豊かな自然と歴史に恵まれた地域である。中仙道が町の東西を走り、垂井宿は往來の人々で賑わった。また南宮大社があり、10世紀後半には美濃国一之宮として栄えた。南宮大社の近くには真禪院、宮代廃寺、宮処寺等もあり、垂井は古い歴史を持った町です。



すばらしい史跡と文化財に恵まれていながら従来までこれらの文化財を展示したり解説したりする博物館機能や調査研究機能を持った施設に恵まれなかった。地元の人々や文化財保護協会の人々からこれらの機能を備え歴史文献センターを兼ねた施設建設の要望がおこり、設立されたのがタルイピアセンターなのです。

タルイピアセンターは図書館・歴史民俗資料館・歴史文献センターから成る複合施設であります。

歴史民俗資料館は郷土の特色をふまえた展示構成になっており、音声・映像センサー・模型を駆使した展示によって臨場感を出すことに工夫がなされ成功しています。



歴史文献センターには郷土に関する歴史・民俗・人物について書かれ、説明された書籍が多

く集められております。卒業論文作成のために多くの大学生が来館するとのことでした。図書館にいけば垂井町に関する情報が多く集められるところに特徴があります。この文献を収集された学芸員や他の人々の努力と博学には驚嘆するものがあります。



図書館は本の世界におもいきり遊べるように設計されています。土・日曜日には多くの来館者で賑わっています。又、企画展示室もあり、年3回の企画展が開催されています。

最近の企画展としては、「竹中家とその家臣団」「戦時下の暮らし」「芭蕉と垂井の俳人たち」「神田幸平 — 明治国永の推進者」、本年度は「ふるさとの学校展」・「長原孝太郎 — 日本近代洋画の指導者」がなされてふるさとの学校の歴史や偉人の生い立ちがあますところなく紹介されました。

タルイピアセンターの基本的なコンセプトは「楽しみ上手な文化人」であり、タルイピアセンターを十分に活用することで楽しみ上手な文化人になっていただきたいとの熱い思いが感じられます。

学芸員の方々も3名常勤され、情熱を持って館の運営にあたっておられます。設立されて間もないタルイピアがさらに地元へ根づくとともに全国に情報を発信できる基地になることを目標に奮闘されています。

今度はさらに企画展の分野を広げ、わかりやすく親しみやすい参加型のタルイピアにすることが願いだとのことでした。職員、学芸員の方々は館の運営、企画展の担当などを通じてそれを踏み台にさらに研鑽をつみたいとの抱負を語って見えました。職員・学芸員の方々の情熱をひしひしと感じながらタルイピアセンターをあとにしました。

- 開館時間 午前10時～午後6時
- 休館日 月曜日 祝日 毎月最終木曜日
- 交通機関 ・JR東海道本線「垂井駅」  
下車徒歩10分  
・名神関ヶ原インター10分  
(機関紙委員 曾我孝司)

## 小川記念館

〒509-77

岐阜県恵那郡明智町宮町 1371

TEL 0573-54-4631

FAX 0573-54-4631

小川記念館は、大正時代の青年期を海外に学んだ小川潤三氏（名古屋市市中村区）のコレクションをはじめ、日本では、大正時代（1910年代）～、欧米ではアール・ヌーボ、アール・デコ 1890年～1930年代の時代を代表するものが主に展示されています。



1991年（平成3年）5月に、遺族によって大正村の一角に設立されました。

展示物としては、巴水の版画、横山大観・前田青邨の手紙、大正モダニズムに通じる男性のネクタイピン、カフスポタン、ゴルフクラブ、ゴルフボール、デカンタ、ライター、パイプ、シガレットケース、ミニチュアカー、薩摩琵琶などです。

館長の小川郁子さんのお話を聞くと、展示物を通して大正時代全部を来館者に見てもらいたいという思いが伝わってきます。筆者もお話を伺いながら展示物を見ていくと、ネクタイピンやカフスポタンのすばらしさに感嘆し、華やかな大正時代の一端に触れた思いがしました。

また、巴水の版画は特に素晴らしく一見の価値があると思います。小川記念館では、この巴水の版画を多く所蔵しておられ、定期的に模様

替えも行っておられます。常連のお客さんも増え、なかには「以前展示してあった版画はどこですか」と聞かれる方もあり、そんなことも考えながら展示替えを行っていただけるそうです。

「小川記念館に行けば巴水が見られる」ということで来館される方も多いそうです。

なお、毎月第二と第四の日曜日の午後、薩摩琵琶の定期演奏会を催されています。大正時代の文化に触れながら薩摩琵琶の音に酔いしれて見るのもいいかと思います。

この他に、まだ展示していないものとして、世界中から収集した50年ほど前のキーホルダーのコレクションがあるそうです。

小川館長さんによると、所蔵品を借りたい人がいたら貸し出してもよいとのことでした。

小川記念館の概要は次のとおりです。



開館時間 午前10:00～午後4:00  
（入館は午後3時まで）

休館日 冬察 12月中旬～2月末日  
展示替えのため、臨時休館あり

入館料 展示内容によって変わることがあります。

（機関紙委員 川合康司）

